

大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

平成 2 1 年 3 月発行

第32号

大阪市史料調査会（編集）

〒 550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

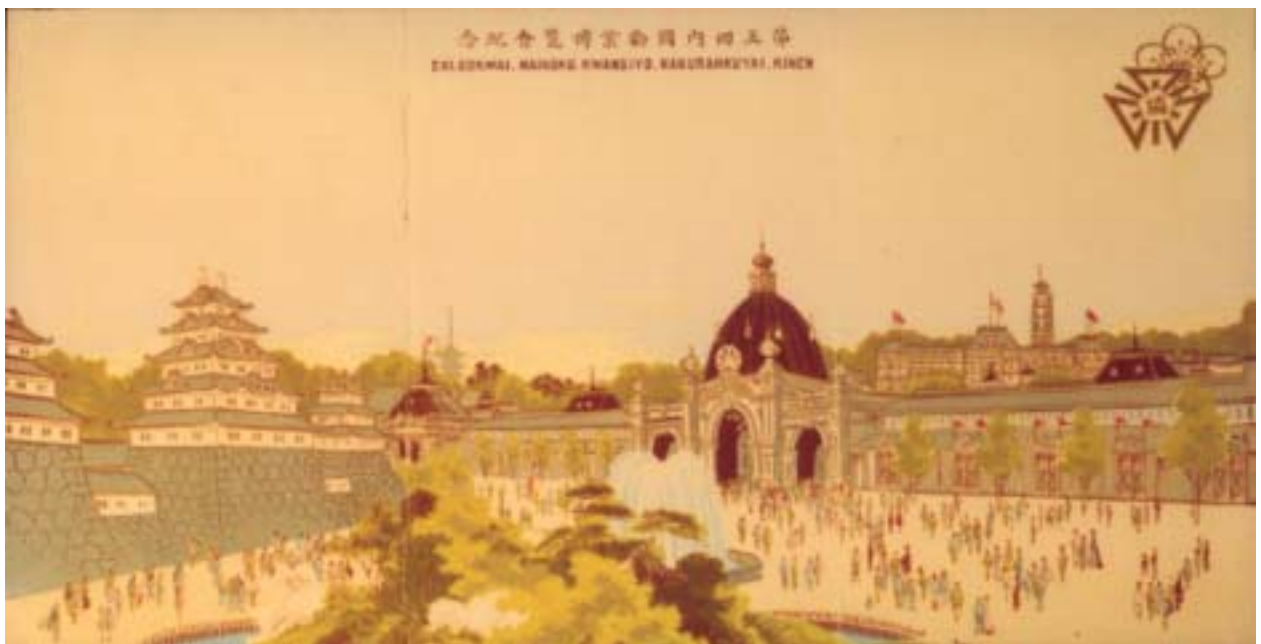
大阪市立中央図書館内

06-6539-3333

第四回内国勧業博覧会の誘致合戦

過去の歴史の中で、大阪市は何度か誘致運動を行いました。中にはついに実現されなかったものもあります。その一つが第四回内国勧業博覧会です。明治 2 8 年（1 8 9 5）京都の岡崎公園において開催された第四回内国勧業博覧会は 1 1 3 万 6 6 9 5 人の参加者を記録し、開催を記念して平安神宮が建設されました。時代祭はこのときから始まります。

明治 1 0 年、殖産興業を目的として第一回内国勧業博覧会が東京上野公園で開催されました。第 3 回までは東京で開催されましたが、第 4 回の地方開催が決定します。誘致に最初に手を挙げたのが堺商業会議所で、続いて京都、大阪、神戸の順でした。堺は「大阪近郊」での開催を主張し、大阪と共同して運動を展開し、奈良もこれに加わりました。やがて神戸が撤退し、大阪対京都の一騎打ちとなります。大阪では有力者で組織された大阪商工協会を中心に、政府や関係省庁への働きかけが行われるとともに、関西各地に遊説隊を派遣して、大阪招致をうったえました。しかし京都側から平安遷都 1 1 0 0 年記念事業として第四回内国勧業博覧会の誘致要望が申請されると、形勢はがぜん京都有利に傾きました。内国勧業博覧会を所轄していたのは農商務省で、当時次官だったのが前大阪府知事の西村捨三でした。大阪側は西村次官を通じて、政府高官への働きかけを行おうとしていたのです。一連の事態を重く見た政府は誘致合戦を收拾すべく動きまゐります。まず開催地を早々に京都と決定し、山田信道大阪府知事に宛てて打電しました。西村次官は大阪側の人々を集め次のように演説し



会場の様子『第五回内国勧業博覧会刷物集成』（市立中央図書館蔵）より

ます。「諸君らも男らしく第四回博覧会は京都に譲った方がよろしい。京都内定について農商務大臣におうかがいしたところ、はっきりとおっしゃった。（中略）政府の議論は決まっており、変更はありえない」。これに対し後に市長となる田村太兵衛は、「もし後日、開催地が変更されるような場合があったら、あなた方はその責任をとられますか、どうですか」と詰め寄ります。西村次官は「私たち一、二次官が責任を負うだけではなく各大臣もその責任をとり、変更があれば辞職をなさるでしょう」と述べました。やがて京都より京都開催への協力要請が大阪に届き、大阪から了承の旨が返事されました。この時、以下の文章が付け加えられました。「もっとも次回は当市で開設したいという希望がありますので、その際はご協力よろしく願います」。第四回内国勸業博覧会開催から8年後の明治36年、現在の天王寺公園を中心に第五回内国勸業博覧会が開催されました。435万693人という未曾有の参加者を誇り、「明治の万博」と称され大成功となりました。大阪市はこの博覧会をきっかけに、「大大阪」への歩みを進めていくのです。（古川武志）

時代と向き合う経済人、五代友厚と野村徳七

金融や商業についての史料を収録した史料編第16巻の編集作業を続けているさなかの昨年秋、米国大手証券会社の破たんに端を発する世界的な金融危機が発生しました。その余波はなお収まらないばかりか、経済活動全般に深刻な影響を与えています。

株式や各種証券などのやりとりを通じて必要な資金を仲介する金融は、資本主義における血液にもなぞらえられることがあります。大阪経済界の近代化のためさまざまな事業にたずさわった五代友厚も金融の重要性に早くから注目し、株式取引所の設置に動き出しました。明治11年（1888）4月、五代は仲間とともに取引所設立の協議を始めるにあたり、当時士族の給与などとして発行されていた金禄公債などの取引の場を提供することは、資金の調達にも都合が良く多くの人の利益につながるだろうとして、その必要性を訴えました。同時に、「しかるといえども、業ノ成否ハ自他ノ信義厚薄如何ニアリ。故ニ事ヲ執ルヤ誠、規ヲ立ルヤ堅。而シテ人民ヲシテ目信ヲ置カシムルニ非ンハ不可ナリ」として規則を守り、誠実な立場で人々の信用を得ることが取引所の発展のために大切であると説いています。こうして組織された大阪株式取引所は翌年1月に取引を開始し、今日の大阪証券取引所につながっています。

さて、時は流れて昭和3年（1928）、大阪野村銀行の創立10周年を祝う席で創業者の野村徳七は、第一次世界大戦後の不況、関東大震災という困難をのりこえ成長した社運を誇っていました。そして、世界の情勢を見るに今後企業はますます巨大化し、その事業や必要資金も証券化が行われる、その流れを進化させるうえで金融業の果たすべき役割は大きいと述べたのでした。いわく、「財界は一の有機体―「生きているもの」なのでありますから、進化論の要不要の原則に従って社会経済的に必要なものゝみが充分の発展を期待し得るのであります。従つて証券資本制のメン・カレントを充分に利用するに寄与する組織と機関とを具ふるものは益々隆盛に趨き、此の大勢を看過し或は又此のカレントに背くものは、しらすしらす、不知不識の裡に衰退の運命に残さるべき事も亦疑なきところであります。」（『野村銀行十年小史』）

こうして時代の潮流を巧みに捉えることで、大阪の小さな両替商から出発した野村証券は、いまや世界的な投資銀行に挙げられるまでになりました。昭和初期に「証券資本制」の未来に意気込み厳しい金融の世界で奮闘していた野村徳七や、明治初期に取引所そのものを創設した五代友厚は、昨今の金融や経済をどう見ているのでしょうか。（松岡弘之）

『新修大阪市史史料編』第16巻「近代 経済1」を刊行しました

大阪市史編纂所では、『新修大阪市史史料編』（全22巻）の第6回配本として第16巻「近代 経済1」を刊行しました。本書は『新修大阪市史』（本文編）を補完するという観点から、本文編第5・6・7巻、すなわち明治維新から昭和初期までの時代における大阪経済に関する史料166点を掲載しています。主な内容は、明治時代以降の大阪での経済活動がどのように整備され行われてきたのか、またそれとともな^{きよりゆうち}ってまちの姿はどのように移り変わってきたのかを知ることができる史料を集めました。マクロ経済としては、金融や商業活動、外国との窓口であった居留地^{きりゆうち}交易、近代的な商法整備と経済界をつくった大阪商法会議所、近代的なまちづくりの始まりである第五回内国勸業博覧会などを取り上げました。その一方でわたしたちの日常的なミクロの経済活動として個々の商店や商店街の史料も掲載し、わたしたちが日々接する「お買い物の場」としての大阪の原風景を知ってもらえるようなユニークな史料集となっています。（A5判、788頁、本体価格5,500円）



○大阪の歴史 第72号

本号には豊臣時代の大坂城に関する論文を掲載しており表紙には平成18年にオーストリアの博物館で「発見」された豊臣期大坂図屏風の^{きりゆうち}大坂城本丸周辺を掲載しています。また江戸時代の大坂を描いた新発見の絵図類を紹介した論文や、戦前・戦時期のハンセン病者についての論文も掲載しています。



【掲載論文】

中村博司「「大坂城之画図」について—古活字版『大坂物語』付図の紹介と考察—」 鳴海邦匡・上田長生「篠山藩青山家文書にみる大坂城代時代の絵図—概要の紹介—」 松岡弘之「戦前期ハンセン病療養所における作業制度と患者自治—一九三二年外島保養院作業改革について—」 廣川和花「戦前・戦時期大阪におけるハンセン病患者の処遇—大阪皮膚病研究所と大阪のハンセン病問題—」（1冊700円+送料210円）

○大阪市史史料 第72輯「近世の城南北平野町 - 上町にあった下町」

^{おださくのすけ}織田作之助の小説の舞台としても知られる上町のうち、現在の中央区^{うえしお}上汐・^{とうへい}東平から天王寺区上汐にかけての一帯は、豊臣時代に大坂城の城下町として開発されたところで、江戸時代には^{きたひらのまち}北平野町という村がありました。行政的には「村」であっても、実質は大坂の町の一部のようなものでもあるという、特異な性格を持つ地域でした。今回の史料集では、北平野町の庄屋の家に伝わった古文書を中心に、文学・名所案内・風聞雑話などの文学資料を加え、これまで知られていなかった江戸時代の上町の実像に迫っています。（1冊1,800円+送料290円）



刊行物販売先 旭屋書店（本店）、大阪歴史博物館、ジュンク堂書店（大阪本店・難波店）大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館3階 06-6539-3333）ほか。なお書店では消費税が加算されます。詳しくは大阪市史料調査会までお問い合わせ下さい。

絵はがきでみる昔の大阪（10）

九条二番道路（大正初年）

九条二番道路という名称がついていますが、これは後の九条中通のことで、道路は明治30年（1897）前後に作られました。写真では右方向から市電が入って来ているので、そこが九条二番道路の停留所であることが分かります。

大阪の市電は、明治36年9月12日に花園橋西詰—築港間に開通したのが最初で、市営としては全国初でした。停留所は、花園橋西詰、九条二番道路、九条発電所前、境川町、市岡中学校前、田中町、八幡屋堤防、三条通、築港栈橋でした。九条二番道路は花園橋の次の停留所で、最初の路線にあった訳です。明治41年8月1日に東西線が開通し、九条二番道路から末吉橋まで通じました。この絵はがきでは、右から入ってくる電車が東西線になります。同じ日に南北線が開通していますが、その後次々と市電の路線が拡充されていきます。大正時代には全盛期を迎えます。



さてこの絵はがきに写っている市電の中で、後方に見える6番の電車は大正6年（1917）に改造さ

れ、大正7年には番号が変更されています。したがって、この写真は東西線が開通した明治41年以後大正6年初頭までに撮影されたと思われます。

写真の前面に写る99番の車両は、明治41年に製造されたものです。このころは運転手が吹きさらしの状態で運転し、架線も中央に立っています。カンカン帽に前垂れ姿の人、ステッキを持つ洋装の紳士、右端に写っているのは薪のようですから、燃料を扱っている店なのでしょう。車が少なかった時代の街のたたずまいがよくわかります。この時期の九条を写したものはあまりなく、貴重な写真です。

江戸時代には、九条村がありましたが、貞享元年（1684）に新川（安治川）が掘られ、安治川の西を西九条というようになりました。明治22年（1889）に、西九条は川北村に編入され、岩崎新田が九条村に編入されました。九条村が大阪市に編入されたのは明治30年のことです。それより前の明治25年に九条新道が完成しています。市電開通によって九条は交通の便もあり、次第に発展し、昭和期には「西の心斎橋」と言われるまでに隆盛をきわめることになります。

（堀田暁生）

▼ 大阪市史編纂所では、所の仕事の紹介や、刊行物の案内などのため、ホームページを開設しています。アドレスは下記のとおりです。または主だった検索エンジンで、「大阪市史編纂所（おおさかししへんさんしょ）」でおさがしてください。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/>